

対話を通じた若者の居場所づくりの取り組み

鹿児島大学生涯学習教育研究センターリサーチアドバイザー

モノづくり工房～響～ 代表 牟田 京子

1. はじめに

モノづくり工房～響～は2010年に代表の個人活動として始まり(2011年に団体設立)地域で社会活動を実践し4年目を迎えるボランティア団体である。2012年度の年間活動報告の中で、当会の活動が継続したものになっていくためには若者のリーダー育成と若者の活動の場づくりが必要であるとまとめた。掲げた課題に対し、どのような取り組みを行ったか2013年度の年間活動報告として取り組みを紹介する。

2. 活動目的と活動の場

モノづくり工房～響～における活動の主な対象者は、青年期¹(おおむね18歳からおおむね30歳未満まで)の若者であり、その活動は鹿児島市教育委員会が管轄している社会教育施設の1つであるサンエールかごしま(生涯学習センターと男女共同参画センターが併設)を軸として活動している。活動目的は以下の3つ。

- (1) 市民の想像力・創造力の育成・豊かな情操を促す活動に尽力すると共に、対話の機会を増やし、健全な家庭づくり・地域づくりの手助けをする。
- (2) 健全で潤いのある地域社会づくりに貢献するため、地域の仲間(日本人・外国人問わず)を巻き込んだ交流の場づくりを行うと共に地域に根ざした国際交流を推進するため国際交流の機会を設け市内レベルの相互理解と友好親善を通し、地域の活性化及び国際化に寄与する。
- (3) 当会の目的に沿った形での人材育成・発表の場作りに努め、鹿児島の地域活性化に寄与する人材を育てる。

中央教育審議会では、平成8年7月答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」において「生きる力」を提言している。また、国際的には、経済開発協力機構(以下、OECDとする。)が、「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに必要な能力を、主要能力(キー・コンピテンシー)として定義し、この能力をはぐくむ教育課程が

国際的に共有されつつあると指摘している。このキー・コンピテンシーは主として3つに集約される。

- ① 自律的に行動する能力
- ② 社会的な異質の集団における交流能力
- ③ 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力

中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会の第二次審議経過報告では「価値の多様化が進む現代社会においては、性別、年齢、個性、価値観等の多様な人材が活躍しており、様々な他者を認めつつ、それらと協働していく力が必要である。また、変化の激しい今日においては、既存の社会に参画し、適応しつつ、必要であれば自ら新たな社会を創造・構築していくことが必要である」²と述べられている。つまり、文部科学省が必要だと述べている能力は、社会とのかかわりの中で培われる能力である。私たちの活動は、地域社会の中で性別、年齢を越え、異なる価値観を持つ人材が他者を認めながら協働している点で多様な他者と協働できる場であると言えるのではないだろうか。活動に参画する若者は、モノづくり工房～響～という団体を社会人基礎力を養える場、自分の資質や能力を認め、成長できる「社会的居場所」として認識している。その裏付けとして社会人R氏は「私は学生の頃から今まで、人に嫌われないように言いたいことを言わずにいた。でもやっと自分らしく意見を言い合える場に巡り合えて、この活動を失いたくない」³と語り、また大学生Y氏は「僕の考えたことを聞いてくれる環境があること、応援してくれる人がいること、見守ってくれる人がいることはとても居心地がいい。自分が温めておいたアイディアを受け入れて、そして、親身になってくれたことが嬉しい」⁴と語っている。

当会の活動すべてに通じる言葉を一言で表すならば「学び」である。団体名称に用いられている「響」という文字には「人の心に響く活動がしたい」という団体設立時の想

² 文部科学省「中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会の第二次審議経過報告」平成22年05月17日

³ 2014年7月対面でミーティング中に社会人R氏が語った。

⁴ 2014年9月22日大学生Y氏がSNSの投稿を介し、該当コメントを掲載。

¹ 内閣府「青少年育成施策大綱」青少年育成推進本部、2008年12月

いが込められている。この言葉を軸におき、地域における学び場を創生し、フラットな関係の中で対話をし、参加者同士が響きあい、多様な価値観に気づき理解するきっかけを提供している。

3. 対話を核とした学びを形成する 取り組み (平成 25 年度)

当会では以下の5つの活動名を柱とし対話の場づくり等を計画した。

(1) 見っど未来かごしま

～高校生とちょっと年上の先輩である若者との対話に関するもの～

高校生の少し年上の先輩 (大学生・若手社会人) 世代による、対話型のキャリア教育プログラムを実施。高校生と同世代の感覚でコミュニケーションをとることが出来る先輩の存在は、先生や保護者に言えない本音や悩みを引き出し、先輩ならではの具体的なアドバイスを行える。実施の結果、高校生からは次のようなアンケート結果が得られた。「自分と同じように進路に悩んだときに、どういう風に考えたのか、聞いてとてもよかった。少しの理由でしたいこととか、好きなことをあきらめていたけど、本当にしたいと思ったら頑張れるし、できるという風にかんがえられるようになった」(高2女子)「選択の幅が広がったとおもいます。やりたいことが増えたのではないかなと思いました」(高2女子)「とても楽しかったです。もっと話したい」(高2男子)という言葉が聞かれた。

相談を受ける若者は「自分たちが高校生の頃にこのような進路相談があれば、違った選択ができていたかも」と語り、「少しでも今の高校生が未来を考える手助けをしたい」と想い活動している。そのために必要なこと、高校生に「語る」上で注意すべきこと、より正確に伝えたいことを伝えるためにはどのようにすればいいか、という事を考え、コミュニケーションスキルや、プレゼンテーションスキルを磨く学習会を自主的に実施し、自己研鑽を積んでいる。この活動は、高校生と少し年上の先輩 (大学生・若手社会人) という「ナナメの関係」を活用した新しいキャリア教育プログラムへと成長する可能性があるだけでなく、提供側の若者にとっても OECD が定義するキー・コンピテンシーを育むことに繋がる。キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協力者会議では「学校、家庭そして地域・

社会や産業界が「協働」して、キャリア教育を推進していくことが、今正に必要とされているのである⁵⁾と述べられている。当会の事例のように若者が自主的に地域活動に参加し、自己成長を促せるような枠組みを創っていくことが、文部科学省が推進するキャリア教育を実施していく上で大切になるのではないかと考える。

17 地域総合 2014年(平成26年)3月10日 月曜日

大学生らが高校生向け進路相談

一緒に将来考えよう

鹿児島県内の大学生や20代社会人らが、高校生のための進路相談を23日に鹿児島市で開く。年齢が近い先輩に気軽に何でも聞いて、「一緒に将来のことを考えよう」と呼びかける。

鹿児島市のボランティア団体「モブメン」の若手メンバーらと、当日実践する高校生が接する機会が、当日実践する。高校生が接する機会が、当日実践する。高校生が接する機会が、当日実践する。

23日 サンエールかごしままで

相談会に向け大学生らの勉強会が2月23日、サンエールかごしま(釜田1丁目)であり、20人ほどが話しやすい雰囲気作りを考えた。参加者は「仕事の身や普段の生活が具体的に伝わる」「拍手や笑顔で、歓迎されていると感じた」。

高校生の進路相談会に向けて勉強会に参加した大学生ら
鹿児島市のサンエールかごしま

相談会に向け大学生らの勉強会が2月23日、サンエールかごしま(釜田1丁目)であり、20人ほどが話しやすい雰囲気作りを考えた。参加者は「仕事の身や普段の生活が具体的に伝わる」「拍手や笑顔で、歓迎されていると感じた」。

2. (小手川美子)

(南日本新聞掲載 2014年3月10日)

2014年(平成26年)3月31日 月曜日 地域総合 16

kagoshima local network

みなみネット@鹿児島都市圏

高校生の悩み 若者助言

相談会 就職、進学：親身に

高校生の悩みに親身に寄り添った。鹿児島市で開かれた相談会。参加者は「仕事の身や普段の生活が具体的に伝わる」「拍手や笑顔で、歓迎されていると感じた」。

相談会に向け大学生らの勉強会が2月23日、サンエールかごしま(釜田1丁目)であり、20人ほどが話しやすい雰囲気作りを考えた。参加者は「仕事の身や普段の生活が具体的に伝わる」「拍手や笑顔で、歓迎されていると感じた」。

相談会に向け大学生らの勉強会が2月23日、サンエールかごしま(釜田1丁目)であり、20人ほどが話しやすい雰囲気作りを考えた。参加者は「仕事の身や普段の生活が具体的に伝わる」「拍手や笑顔で、歓迎されていると感じた」。

相談会に向け大学生らの勉強会が2月23日、サンエールかごしま(釜田1丁目)であり、20人ほどが話しやすい雰囲気作りを考えた。参加者は「仕事の身や普段の生活が具体的に伝わる」「拍手や笑顔で、歓迎されていると感じた」。

(南日本新聞掲載 2014年3月31日)

地域で行う活動において、活動の信頼性をあげることや幅広い広報活動をするためにも教育機関や行政機関との連

⁵⁾ 文部科学省 キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協力者会議 平成 23 年 12 月 9 日

携は非常に重要である。一方で、「連携する」ことのむずかしさを実践の中から、常々感じている。鹿児島市が提言する「市民との協働によるまちづくり」⁶は容易にはいかない。この活動において目指す所は高校における進路相談の実施にある。実施に向け、高校へ出向き趣旨説明し、協働したい意向を伝えるが、返ってくる言葉は、「高校生にとって有益な活動であることはよくわかるが、数多くある市民活動団体の中から、たった1つの団体を支援するようなことはできない。1つを認めればすべてを認めなければならない」「公共機関でもないところをお願いはできない。しかるべきルートを辿ってほしい」といったものが多い。つまり、活動の有効性は認めていても連携はできないという高校側の立場がある。ここで連携を阻むものは「平等性」や「公共性」なのではないだろうか。

産学官連携の重要性は広く知られているが、学校側が現実的に求めているものは「産学官」による3者連携ではなく、「学官連携」の2者連携なのではないかと疑問を持つ。産学官連携という言葉だけが1人歩きしているのではないかと感じた事例でもあった。文部科学省が「社会全体を通じた構造的な課題」⁷と述べているが、まさに構造的な問題があると言えよう。

(2) 国際交流・国際理解に関する活動

異なる国籍・価値観・文化を持った人達との対話や学び

食を媒体とした国際交流

昨年度に引き続き、食を媒体とした国際交流会を毎月実施している。留学生や大学生を巻き込み（協働し）、司会やゲームを担当してもらうなど、従来通りの方式で運営を続けているが、この企画は単に留学生支援というだけでなく、司会やゲームを担当する学生にとっても社会人基礎力を身に付けられるよい機会となっている。一般的にキャリア教育の達成目標に実践力・企画力・協働力があげられ、この3つが総合的の就業力といわれているが、学校の枠を超え、地域で行われる活動で主催者を務めるにはこれらの能力が必須である。運営者側がサポートをすることで企画に不慣れな学生であっても、交流を通じた人と人との出会いの場を創出することができ、参加者から「ありがとう」と

いう感謝の言葉を受け取ることが出来る。これらは、学生の達成感や自己肯定感を上昇させる。当会における国際交流に関しては英語を主とした交流ではなく、日本語が主となるため、英語を話すことを目的に集った場合、満足感が得られにくい。そのため、鹿児島市で開催される国際交流の情報や国際交流団体の情報を多くもち、要望にあった団体や活動を紹介したいと考えているが、残念ながら継続的に国際交流活動をしている団体は非常にまれである。市民の多様なニーズに応えるためにも鹿児島における国際交流の推進に貢献できる市民活動団体の存在が必要であると考えている。



(国際交流会場に鹿児島で活躍する「じゃんけんまん」が登場。ゲームを楽しむブルガリアの留学生)

ベトナム食文化交流会

食を媒体とした国際交流としてもう1点実施した企画がある。これは日本に留学しているベトナム人留学生からの依頼で実施することとなった。

年々、鹿児島に留学してくるベトナム人留学生の数は増加している。しかし、ベトナムの事を知っている鹿児島人は少ないのではないかと感じたベトナム人留学生（グエン・クアン・テイン氏）が「ベトナムの事をもっと知ってほしい、発信したい」と願い、日頃より親交のあった当会に依頼があり実施に至った。この交流会では、ベトナムの文化紹介のあとに、ベトナムの伝統料理を参加者に振舞い、交流を図った。日本語が上手に話せないベトナム人留学生も多かったが、たどたどしい日本語で「日本人の友達たくさんほしいです。遊びに行きたいです。」とスピーチする留学生を目の当たりにした参加者は、「ぜひ友達になり、次は私たちが鹿児島を案内してあげたい」と、この食文化交流会をきっかけに友達になり、一緒に桜島まで出かけた。食事をしたにいたりなど、交流が持続している。この

⁶ 鹿児島市ホームページ 市民参画の窓～市民との協働～「協働とは、市民グループや住民の方々も担い手となって、新しい公共をつくる事」

⁷ 文部科学省中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（第2次審議経過報告）」平成22年5月17日

ことから留学生が自ら母国の文化について積極的に発信する場があることの必要性を感じた。



(南日本新聞掲載 2013年9月3日)

石ころアートで国際交流

モノづくりを媒体とした国際交流では「世界に1つだけのペーパーウエイト」を制作する創作活動を実施した。本企画は、いおワールドかごしま水族館 ボランティア自主グループ 翻車魚倶楽部 磯谷多麻夫氏との協働で成り立っており、昨年度に引き続き2回目の実施となる。モノづくりを媒体としての国際交流の良さは、コミュニケーションに際し、多くの言葉を必要としないことだと考えている。石ころアートを創作するにあたり、アクリル絵の具や筆を使うが、「貸してほしい」という気持ちを伝える場合、指さしなどのボディランゲージで伝え合うことが可能であるだけでなく、大人から子どもまで国籍問わず、創作活動を通し、豊かな想像力、創作力を育み、自分と他者の作品の違いから認め、認められるという経験を培うよい機会となる。

この他に本年度は新たな試みとして留学生を対象とした日本の家見学ツアーや猫カフェツアー・あいのり工場見学ツアー・ベトナムスタディツアー報告会・市電ツアーなどを実施した。



(熱中して作品を作るベトナム人留学生)

日本の家見学ツアー

この企画は住宅展示場で、日本の家屋について見学するというツアーである。住宅展示場は購入希望者を対象に公開しているものであるため、単なる見学は住宅展示場運営会社からは好まれない。しかし、見学を許可し、日本の家屋や技術力を海外にPRできることの意味を丁寧に伝えることで、一部の展示場から制限付き見学の許可が下り、実施ができた。中国・台湾・香港・ベトナムからの留学生4か国10名を引率し、見学を実施したが、日本の家屋の構造についての説明を聞き、その技術について深い関心を示していた。特に鹿児島大学工学部の留学生(ベトナム)は建築素材について積極的に質問するなどの光景も見られた。このように、日本人や購買者のみを対象とした会社であっても、情報を閉ざす事なく、技術や製品を開示することで日本の技術力の高さを海外にPRでき、またCSR活動の一助ともなる。今後も民間企業との協働を推進し、留学生支援や鹿児島や日本の製品・文化についてPRしていきたい。



(住宅展示場スタッフより建築方法について説明を受ける留学生)

猫カフェツアー

この猫カフェツアーは新聞記事などで留学生支援を実施している当会の存在を知った猫カフェ店主が「留学生が寂しい想いをしないように少しでも手助けできることはないだろうか」と、自身の経営する猫カフェへ留学生を招待したいと問い合わせしてくれたことより実施することができた。店主の中村順子氏はNPO法人「犬猫と共生できる社会をめざす会」で活動をしており、同店は猫カフェのほか、里親を探す猫たちの受け皿としての役割を担う。当会が毎月猫カフェツアーの活動報告をインターネットなどで対外的に公表することで、協働先である猫カフェの広報にもつながる。猫カフェの取り組みが知られるという事は野良生活を送っていた猫たちにとっても里親が見つかるきっかけに繋がるという意味で互いにWIN-WINの関係が成り立つと考えられる。この企画にあたっては、留学生の引率や、猫カフェ運営者への連絡・留学生への連絡など一連の作業を国際交流に関心のある学生が担当している。学生が担当することで学外の社会人（店舗オーナー）と連絡を取り合い、ツアーの日程を調整し、参加メンバーを把握し、社会人と留学生との間にたって企画調整を行うなど、引率を担当した学生にとってもキャリア育成の一助をなす取り組みとなっている。



(猫カフェで癒されるドイツ・中国からの留学生)

ツアー実施後、参加した留学生から「(猫が)とても可愛かった。自分の家(母国)でも猫を飼っているのが懐かしかった。また参加したい」と喜びの声が聞かれた。キャットセラピーという言葉があるように、動物を可愛がることで自分の心を癒すことが出来る猫カフェツアーは、同店経営者の協力があって成り立っている。本事例のように「潜

在的に誰かのために何かしたい」と思っている人や団体もいるのではないだろうか、と気が付いた例であった。今後は従来に増して積極的にインターネットや新聞を活用した情報発信を行い、留学生や学生のキャリア教育の支援につながる連携の輪を広げていきたい。

あいのり工場見学ツアー

大学生(国際大学・鹿児島大学)、社会人が協力して主催し、複数の車に留学生と共に同乗し、交流を図りながら、かるかん・さつま揚げ工場に行くというものだった。交流と工場見学という2つの体験を同時に楽しめるという企画だ。17名(日本・ベトナム・台湾・中国)4か国の参加者を4台の車で引率した。昨年度までは、人的リソースの不足から、活動の主軸をサンエールかごしまに置き活動していたが、本年度は活動の幅を広げるために、意識的に「巻き込み力(協働力)」を強化してきた。その効果があり、活動の幅を広げることができた事例である。



(かるかん・さつま揚げ工場で説明を受ける参加者)

ベトナムスタディツアー報告会

市民の発表の場づくりの一環で行ったベトナムスタディツアーでは鹿児島国際大学1年のU氏が自身のボランティア体験談を語った。U氏はベトナムへ行く前から「帰ってきたら報告会をしたいと思っています。協力してもらえませんか」と当会に打診し、ツアーへと参加した。U氏は過去、当会が実施した大学生による報告会(カンボジアスタディツアー報告会)の実例を知っていたため、せっかくスタディツアーに参加するなら、自分の得た体験を多くの人と共有したいと思うようになったということだった。学生が自身の経験・想いを学外でプレゼンテーションしたことがほか

の学生への刺激となり、別な学生が動き出す。まさに地域で学びあい、高め合っている事例と言えるのではないだろうか。U氏の報告会には南日本新聞の取材も入り、参加者全員で「戦争」「平和」「幸せ」について考え、対話をした。参加者の中にはベトナム・ドイツの留学生も含まれており、規模は小さいながらも世界平和について考えた時間であった。この報告会に大学の講師が参加しており、U氏のプレゼンテーションを聞いた大学の講師が「U氏は素晴らしい体験をされたと感じた。ぜひ、自分が受け持つ学生にもU氏の生の体験談を聴かせたい」との要望があり、自分より年齢が上になる学生の前で再び報告会をするという機会を得た。



(南日本新聞掲載 2013年11月5日)

このように学生が自ら発案者となり、動き出す事でもしめない展開が起こることがある。それには動きだせる受け皿が必要なのだ。その受け皿となる市民活動団体が多ければ多いほど、学生の社会参画・地域でのキャリア教育・職業教育が推進されるのではないだろうか。

市電ツアー

従来、日本人と留学生の交流を目的とした国際交流は、サンエールかごしまを拠点として行っていた。そこから見えてきた問題点として、鹿児島大学などサンエールかごしま近隣の大学からアクセスしやすい一方で、鹿児島国際大学や志学館大学、九州日本語学校などに在学する留学生にとっては場所がわかりにくい・遠い・市電や市バスに頼らないとアクセスしにくい、などのデメリットがあり、その結果、鹿児島大学以外の留学生の参加率が低い状況にあった。そこで、留学生が鹿児島での生活をより広く楽しめるように市電の乗降方法を指南する市電ツアーをNPO法人鹿児島グローバルウィズ(当会同様、国際交流を推進する

団体)と協働し企画することにした。この企画は留学生のための企画として実施したため、日本人の参加を制限し、英語・中国語・韓国語⁸などの語学が堪能な日本人学生に引率を依頼した。同じ国出身の留学生が別な学校で頑張っていることを知った参加者は、市電ツアーを介し、互いに仲良くなり、連絡先を交換するなど、留学生間の橋渡しにもなった企画であった。



(南日本新聞掲載 2013年10月14日)

鹿児島での民間における国際交流活動は、グローバル化が進む中で、衰退しているようにも感じる。NPO団体の活動停止や民間サークルの活動縮小がみられているのである。当会での国際交流は主として若者を対象にしているが、外国籍を持つ鹿児島在住者の支援や、英語やその他多言語を用いて交流を促進する団体などの存在が必要なのではないかと考える。

⁸平成24年12月現在鹿児島には6千人以上の外国人が生活しているが、約9割がアジア圏の方々であることより(かごしまの国際交流(平成26年1月)資料編 在留外国人の状況 鹿児島県及び全国の国籍別在留外国人数 https://www.pref.kagoshima.jp/af09/documents/31054_20140310151511-1.pdf (2014/10/20 アクセス))世界の共通言語である英語以外に中国語・韓国語が話せる日本人がスタッフとして参加した。その他、ここ数年、鹿児島に留学してくる人数が増えつつあるベトナム・ネパールの言語習得者の協力を仰ぎたかったが、同国の言語を話せるボランティアスタッフが見つからなかった。

(3) ワールドカフェ

多様な年齢層や立場、個性、価値観を持った人達との対話

ワールドカフェとは Juanita Brown (アニータ・ブラウン) 氏と David Isaacs (デイビッド・アイザックス) 氏によって、1995 年に開発・提唱されたものである。「知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話をを行い、自由にネットワークを築くことのできる『カフェ』のような空間でこそ創発される」という考えに基づいた話し合いの手法を指す。当会では、鹿児島市生涯学習プラザとの協働講座として、学生・主婦・社会人・留学生と多様な人があつまり対話するワールドカフェと言う場を設けた。この活動は来年度も引き続き採用していかうと考えている。その上でどのようにしたら、鹿児島の発展に貢献できるのかを考えた。その結果、地域におけるファシリテーターを育成することで地域の対話を増やし、地域を活性化できるリーダー育成に繋がると考えた。そのため本年度はプロのファシリテーターを毎月招き、育成を視野にいたれた司会進行を依頼した。年間を通し、随時学生が進行に関わる場を作るなど、意図的に働きかけ、参加参画への動機づけを行った。来年度は再び、鹿児島市生涯学習プラザとの協働講座として開催し、ファシリテーターとして学生や地域住人を巻き込んだ企画を立案する予定である。

(4) 学生サミット

異なる学校や学年、学部を越えた学生同士の対話

学生と学生が学科の枠・学年の枠・学校の枠を超えて語り合う場を創出。主催は鹿児島大学・鹿児島国際大学の学生 2 人が担当。テーマ立案・当日のタイムスケジュール作成・アイスブレイクなどの、当日の司会進行を担当した。この企画は鹿児島大学生涯学習教育研究センターと共催で開催し、本年度は 3 回実施した。

本企画の 1 回目は、テーマを「恋」とした。一見、言葉として軽く、導入しやすいテーマであるが、このテーマの根底にある「ジェンダー」や「男女共同参画」について参加した学生同士で考えてもらうような内容で主催者である大学生 2 人が進行をした。留学生も参加していたため、エジプト・ベトナム・日本の学生によるそれぞれの結婚観・恋愛観を知ることができ、文化や風習で異なる家庭内における男女の役割についての「違い」を知った企画となった。対話の際には、日本語で対話するグループ・言葉の壁を乗り越えベトナム語と日本語で対話するグループ・英語で対話するグループなどそれぞれだった。2 回目のテーマは「夢」

に設定した。自分が将来何をしたいと思っているのか、そのために今、何をしているのか、などを語りあった。3 回目は「学生のうちにしておきたいこと」をテーマに社会人の体験談を聞き、学生生活をどのように過ごせばよいかを考えるきっかけとする「対話型キャリア教育」の場を創出した。1 回目、2 回目の学生サミットでは当日の司会進行のみを担当していた主催学生だったが、3 回目に至っては、ゲストスピーカーとして協力して下さる社会人への連絡や集客などすべてを学生が請け負った。

17 地域総合 2013年(平成25年)10月21日 月曜日
 kagoshima local network みなみネット@鹿児島県

和やかに「恋」議論 県内学生サミット初企画



鹿児島県内の大学や専門学校に所属する学生が集まり、一つの議題について語り合う「学生サミット」が19日、鹿児島市のサンエールかこしまであった。初めての開催。鹿児島大や鹿児島国際大、九州日本語学校などから約20人が参加。「恋」をテーマに和やかなムードで意見交換した。若者育成や留学生支援を目的に活動するボランティア団体「モノづくり工房」が主催。「学生による学生のための語り場」を目的として参加する学生と地域住人を巻き込んだ企画を立案する予定である。

生らが企画・運営した。グループに分かれ、参加者は国籍も日本人と外国人の混在は「友達付き合いから恋にならざるを得ない」という

「恋」について語り合う学生サミットの参加者
 —鹿児島市のサンエールかこしま

た小テーマに基づき、それぞれの文化を踏まえて笑顔で話し合った。出された意見は、グループごとに結果を発表した。

運営を担当した鹿児島大教育学部2年の高もつと参加者を増やした。出された意見は、グループごとに結果を発表した。

第2回は12月開催予定。(室園 務)

(南日本新聞掲載 2013年10月21日)

(5) モノづくり

モノづくり作業を通して、親子の対話、親同士の対話

モノづくりは団体設立時から取り組みを続けている活動である。クレイアートを介した親子の交流という形でこども劇場や鹿児島市生涯学習プラザ、ドルフィンポート夏休み手作り教室、サンエールさわやかウエーブまつりなどの依頼により実施した。講師には当会が鹿児島市生涯学習プラザと協働で実施したクレイアートボランティア養成講座の

卒業生が担当した。このようにボランティアをする人材を育成し、その活躍の場をも包括し提供している。

4. 活動により見えてきた市民活動団体における問題点

本稿では、年間活動報告をすると共にそれぞれの活動から見えてきた諸問題についても述べたが、市民活動団体として4年目を迎えた現在、実践家として見えてきた市民活動の限界を感じている。全国の市民参画推進局は、「市民参画の推進」や「市民活動の促進」「市民と協働によるまちづくり」というスローガンを掲げている。しかし、市と協働しているのはごく一部の限定された市民活動団体や平素より公共機関と関係のある個人であることが多い。市と協働できたとしても資金の援助等はなく運営は受託団体の自助努力に任されていることが多い。当会においても同様で、鹿児島市生涯学習プラザとの協働で企画を実施しているが、資金的援助は一切ない。団体運営に関わる家賃・電気代・水道代・イベント時における備品・各講座の謝金などを鑑みても、最低年間60万は団体維持費が必要となる。しかし、社会教育施設の1つであるサンエールかごしまで企画を行う場合、収益性を伴ってはいけないという前提がある。会の運営費なども収益性と捉えられてしまい、活動を継続していくための資金は個人の出費や会費収入、もしくは公的資金援助に頼らざるを得ない。当会は「持続可能な団体」をめざし活動しているので助成金に頼らず自助努力で運営を続けているが、その活動維持には資金的困難がつきまとう。

留学生を対象とする企画では、語学が堪能ではない留学生の支援を主軸に考えている。彼らは日本語能力が養われていないが為に、アルバイトが出来なかつたり、していたとしても言語を必要としない裏方の仕事になりがちである。彼らにとって日本人と交流をするということは、教科書で学ぶ日本語ではなく、生の日本語を学ぶということであり、彼らに最も必要なことだと筆者は考えている。語学に不安を抱えた留学生が、自分の懐を痛めてまで交流会に参加するだろうか、と考えた場合、少しでも留学生の参加を促進できるようにと人数無制限で各企画に無料招待している。彼らに掛かる飲食費・交通費などのほとんどを団体で負担している状況である。なぜならば国籍、言語、文化や性などの違いを認め、尊重しあう「多文化共生社会」「多文化共生の視点」からの地域づくりが求められている現代

において、日常生活に落とし込んだ地域における多文化共生を促進するための活動こそが必要だと考えているからだ。残念ながら、筆者が活動を通し見てきた鹿児島では「多文化共生を促進するための活動」は縮小傾向にあると言える。当会においてもその運営は苦しく、維持費については頭を抱えている。しかし、このような苦しい状況でも活動を継続し続けられるのは、当会の活動を求めてくれる人々の存在があるからである。

27 地域総合 2014年(平成26年)2月20日 木曜日

6ヵ国の留学生がおもてなし

カフェ開いて国際交流

鹿児島市住の外国人留学生と交際する「インターナショナルカフェ」が15日、鹿児島市のサンエールかごしまで開かれた。留学生らが中国語や韓国語、英語を母語で記されたメニューで注文取り、飲み物やケーキを運んだ各テーブルで来場者と会話を楽しんだ。

外国人交際若者育成会を主催する鹿児島市のボランティア団体「モフリン」が、留学生らと交流する「インターナショナルカフェ」を開いた。当日は中国、韓国、ドイツ、イギリスなど6カ国11人がボランティアスタッフとして参加。地元住の来場者とそれぞれ興味のある分野で語り合ったり、記念写真を撮影したりして交流を深めた。

同団体は「多文化共生社会」を推進する。鹿児島市生涯学習プラザとの協働で企画を実施しているが、資金的援助は一切ない。団体運営に関わる家賃・電気代・水道代・イベント時における備品・各講座の謝金などを鑑みても、最低年間60万は団体維持費が必要となる。しかし、社会教育施設の1つであるサンエールかごしまで企画を行う場合、収益性を伴ってはいけないという前提がある。会の運営費なども収益性と捉えられてしまい、活動を継続していくための資金は個人の出費や会費収入、もしくは公的資金援助に頼らざるを得ない。当会は「持続可能な団体」をめざし活動しているので助成金に頼らず自助努力で運営を続けているが、その活動維持には資金的困難がつきまとう。

留学生を対象とする企画では、語学が堪能ではない留学生の支援を主軸に考えている。彼らは日本語能力が養われていないが為に、アルバイトが出来なかつたり、していたとしても言語を必要としない裏方の仕事になりがちである。彼らにとって日本人と交流をするということは、教科書で学ぶ日本語ではなく、生の日本語を学ぶということであり、彼らに最も必要なことだと筆者は考えている。語学に不安を抱えた留学生が、自分の懐を痛めてまで交流会に参加するだろうか、と考えた場合、少しでも留学生の参加を促進できるようにと人数無制限で各企画に無料招待している。彼らに掛かる飲食費・交通費などのほとんどを団体で負担している状況である。なぜならば国籍、言語、文化や性などの違いを認め、尊重しあう「多文化共生社会」「多文化共生の視点」からの地域づくりが求められている現代

「日本人にお礼したい」

「モフリン」が、留学生らと交流する「インターナショナルカフェ」を開いた。当日は中国、韓国、ドイツ、イギリスなど6カ国11人がボランティアスタッフとして参加。地元住の来場者とそれぞれ興味のある分野で語り合ったり、記念写真を撮影したりして交流を深めた。

同団体は「多文化共生社会」を推進する。鹿児島市生涯学習プラザとの協働で企画を実施しているが、資金的援助は一切ない。団体運営に関わる家賃・電気代・水道代・イベント時における備品・各講座の謝金などを鑑みても、最低年間60万は団体維持費が必要となる。しかし、社会教育施設の1つであるサンエールかごしまで企画を行う場合、収益性を伴ってはいけないという前提がある。会の運営費なども収益性と捉えられてしまい、活動を継続していくための資金は個人の出費や会費収入、もしくは公的資金援助に頼らざるを得ない。当会は「持続可能な団体」をめざし活動しているので助成金に頼らず自助努力で運営を続けているが、その活動維持には資金的困難がつきまとう。

留学生を対象とする企画では、語学が堪能ではない留学生の支援を主軸に考えている。彼らは日本語能力が養われていないが為に、アルバイトが出来なかつたり、していたとしても言語を必要としない裏方の仕事になりがちである。彼らにとって日本人と交流をするということは、教科書で学ぶ日本語ではなく、生の日本語を学ぶということであり、彼らに最も必要なことだと筆者は考えている。語学に不安を抱えた留学生が、自分の懐を痛めてまで交流会に参加するだろうか、と考えた場合、少しでも留学生の参加を促進できるようにと人数無制限で各企画に無料招待している。彼らに掛かる飲食費・交通費などのほとんどを団体で負担している状況である。なぜならば国籍、言語、文化や性などの違いを認め、尊重しあう「多文化共生社会」「多文化共生の視点」からの地域づくりが求められている現代

（南日本新聞掲載 2014年2月20日）

留学生の1人（グエン・トゥ・チャン氏）は「日本語が上手になるためにどうすればいいか悩む時もありました。教科書で勉強した日本語は標準語です。日常の会話と違います。だから通常、日本人とたくさん話さないとなかなか上達できないと思います。日本語学校の学生のことを考えてくださり、とても感謝しております。」と語ってくれた。更に本年度は今まで支援してきた留学生の皆さんが、発足以降、赤字が続く当団体を支援しようとインターナショナルカフェというチャリティー企画を提案している。この企画は、本間はありん氏（韓国出身）の声掛けの元、「鹿児

島の人と交流すると同時に、モノづくり工房〜響〜の活動をより多くの人にしてもらいたい」という目的で実施された。中国、韓国、ドイツ、イギリスなど6カ国11人がボランティアスタッフとして参加した。50人ほどの日本人来場者と外国語や日本語を交え語り合い、記念写真を撮影したりしてカフェでの交流を深めた。その後、企画実施による売上金のすべてを当会の運営費に寄付し、会の運営を支援してくれた。

カフェで国際交流いかが

鹿児島在住の留学生ら企画

鹿児島在住の外国人留学生らによる「インターナショナルカフェ」が15日、鹿児島市のサンエールかこしまである。中国語、韓国語、英語などを話す外国人がウエーターを務め、注文を受けたり、来場者と

15日、サンエール

鹿児島在住の外国人留学生らによる「インターナショナルカフェ」が15日、鹿児島市のサンエールかこしまである。中国語、韓国語、英語などを話す外国人がウエーターを務め、注文を受けたり、来場者と

鹿児島在住の外国人留学生らによる「インターナショナルカフェ」が15日、鹿児島市のサンエールかこしまである。中国語、韓国語、英語などを話す外国人がウエーターを務め、注文を受けたり、来場者と

(南日本新聞掲載 2014年2月11日)

冒頭で触れた当会の団体名称に用いられている「響」という文字の「人の心に響く活動がしたい」という信念が留学生に届き、留学生が自発的にアクションを起こした。これは国籍、言語・文化の違いを超え、相互理解やお互いを尊重することが出来たからこそ成しえたものであり、多文化共生の根幹となるものではないだろうか。

「多文化共生」という言葉だけが1人歩きするのではなく、現実に社会で生活・活動する我々にとって、どのような取り組みが、真の意味で「多文化共生」というものを促進していくことに繋がるのか、という事を考え、問題提起し続けて行きたいと考える。